



# 新任期の小学校教諭における生徒指導・特別活動を中心としたリアリティ・ショックへの対応：学級担任から専科教員への移行を踏まえて

瀬川, 千裕

---

(Citation)

教育科学論集, 27:35-42

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489611>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489611>



# 新任期の小学校教諭における生徒指導・特別活動を中心としたリアリティ・ショックへの対応

—学級担任から専科教員への移行を踏まえて—

Coping with the reality shock experienced by a new elementary school teacher in student guidance and special activities  
Transition from a homeroom teacher to a subject-specific instructor

瀬川 千裕\*

Chihiro SEGAWA

(\*人間発達環境学研究科・博士課程後期課程大学院生)

キーワード：生徒指導 (Student guidance)、特別活動 (Special activities)、新任期 (a New elementary school teacher)、リアリティ・ショック (the Reality shock)

## 1. はじめに

筆者は2017年4月-2020年3月までの3年間、奈良県下のS小学校に勤務していた。2017年3月-2020年3月までの3年間は、筆者にとって新任期であった。

新任期とは、高井良健一によると、「教師にとってははじめの3年間」(高井良 2015: 112)であり、「教師の仕事とはいったいどのようなものなのかのイメージを育む大切な時期」(高井良 2015: 112)である。新任期にはしばしばリアリティ・ショックに遭遇するといわれている。リアリティ・ショックとは、教職に就く以前の教師イメージが、教師のしごとを通じて組み換えられていく過程に生じる葛藤を指す(高井良 2015: 112)。リアリティ・ショックは教職生活のイニシエーション(通過儀礼)といわれる。リアリティ・ショックをいかに克服していくかということが、その後の教職生活のありかたを方向づける。そのため、リアリティ・ショックとリアリティ・ショックの克服の方法を明らかにすることは、教職を考えるうえで重要である。

リアリティ・ショックが生じる要因として、現実の子どもとの関わりや校務分掌、保護者対応といった多様な教師の職務が考えられる。とくに、現実の子どもとの関わりは教師イメージを崩壊させる。現実の子どもとの関わりは、当然、子どもが登校して下校するまでの時間にある。子どもが登校して下校するまでの時間に授業があり、特別活動がある。また、授業や特別活動を進めていると生徒指導も生じる。

本稿では、リアリティ・ショックとリアリティ・ショックの克服の方法について、リアリティ・ショックが生じやすい授業、特別活動、生徒指導に焦点をあてて検討する。その方法として、筆者のライフヒストリーを記述する。前述の通り、筆者は新任期をすごしている。筆者の新任期は特徴的であり、小学校に着任した1年目に第3学年の担任を、2・3年目に専科教員(図画工作科・

家庭科)を経験している。学級担任と専科教員では、子どもとの関わりが変わるため、リアリティ・ショックとリアリティ・ショックの克服の方法が異なる。新任期に学級担任と専科教員を経験した筆者のライフヒストリーを記述することで、リアリティ・ショックとリアリティ・ショックの克服の方法の多様なありかたを明らかにできる。

## 2. 教職への道

### (1) 大学入学まで

小学校1年生のとき、小学校教師になろうと思った。なぜなら、小学校1年生のときの担任の先生に憧れたからである。担任の先生は、体が弱く学校を休みがちであった筆者に、放課後、付きっきりで勉強を教えてくれた。付きっきりで勉強を教え、1人の子どもに真摯に向き合うその先生の姿に憧れた。それ以来、小学校教師になろうと思い、小学校教師になるために必要なことを考えた。小学校教師になるためには、N大学に進学する必要があると思った。子どもながらもN大学に進学することを決めていた。

高等学校に進学してからは、N大学を第1志望とし、早い時期から受験勉強を始めた。第1学年の頃より、夏休みに数日おこなわれる受験対策講座(国語・日本史・英語)に参加した。学習塾に行かなかった筆者にとって受験対策講座は受験勉強を進めるよい機会となった。ただ、継続的に受験勉強をしていなかったため、受験勉強の成果はあまりあがらず、第3学年に秋となった。どうしてもN大学に進学したい筆者は、進路指導室に相談した。進路指導担当の先生(担当教科:英語)が個別に指導して下さることになり、ほぼ毎日1回60分、英語を個別に指導してもらった。また、個別指導を何人かの先生(担当教科:国語/生物)から受けられることとなった。個別指導を受けるなかで、個別指導

をしてくださる先生方は筆者の第1志望であるN大学の出身者であることがわかった。先生方は、自らのN大学での学びの話をしてくださることもあった。たとえば、N大学は学生数が少ないからいいよ、教師になるための知識をいっぱい教えてくれるよ、といった話であった。先生方の学びの話を聞くことで、N大学に進学したいという気持ちはどんどん高まっていった。N大学には推薦入試もあり、地域推薦と一般推薦を受験した。推薦入試で入学することはあまり考えていなかったが、一般推薦で合格した。今でも一般推薦の面接を覚えている。「どのような教師になりたいですか」と質問され、筆者は「子どもの個性を大切にしたい教師になりたいです」と答えた。面接官は「子どもの個性には天性のものと環境によってつくられるものがあります。どちらの個性を大切にしますか。子どもの個性とはどのようなものですか」との再質問を受けた。高等学校第3学年の筆者にはとても難しい質問に思えて、うまく答えられなかったことを覚えている。大学に入学してしばらく個性の問題について考えていた。

## (2) 大学・大学院での学び

第1志望のN大学に入学できたという喜びもあり、大学入学後1年間ほどは通学すること(大学の門をくぐること)が嬉しかった。1・2回生の頃は主に教員免許を取得するための授業を受講した。単位を取得するだけではなく、多くのことを学びたかった筆者は自主的なレポート作成やプラスの課題に取り組んだ。授業内容自体はそれほど難しいものではなかった。中等教科教育法の(中学校・高等学校の国語の免許取得に関わる)授業は楽しかった。N大学の教育学専修に入学したが、国語科教育専修に転修しようかと考えたくらい、中等教育法の授業に知的好奇心がくすぐられた。

3回生になり、教員免許を取得するための授業は減り、専門(教育学)の授業が増えた。専門の授業は多くても10名程度で、少ない授業は2人であった。非常に少人数で、教育学をしっかりと勉強しなければ、という気持ちが湧いた。所属するゼミを考える時期になり、1番希望者の多い教育方法学のゼミに所属したいと考えた。そのゼミは毎年ゼミ生全員が教員採用試験に合格しており、合格の実績に惹かれた。筆者の希望は叶い、教育方法学のゼミに所属することとなった。ゼミの先生は筆者にとってやや難しい課題を出していた。やや難しい課題に取り組むことは想像以上に楽しく、課題として読んだ文章をもとに、教育学や教育方法学の専門書を読むようになった。教育技術の法則化運動で有名な向山洋一や「学びの共同体」論で脚光を浴びた佐藤学はゼミでの課題をきっかけに知った。教育学のテキスト本に目を通し、基本的な知識や興味のある事柄を集めていった。また、他のゼミの先生におすすめの本を尋ねた。他のゼミの先生におすすめされた中内敏夫『学力とは何か』(岩波書店、1984年)に影響され、学力の研究をしたいと考えるようになった。そのほか、ルソー『エミール』もおすすめされた。『エミール』を読んだことをきっかけに岩波文庫の教育関係の哲学書を読んだ(カント、デューイ、ペスタロッチ等)。哲学書は難しく、理解できない部分も多かった。教育学や教育方法の専門書や教育関係の哲学書

を読み進めていくうちに、知らない世界を知ることが楽しくなり、もっと知りたいと思うようになった。同時に、小学校教師になりたいという気持ちが薄れていった。

筆者は、1回生の頃より、学校支援ボランティアであるスクールサポーターとして週1〜2回、小学校で学習支援をしていた。学習支援を続けるなかで、筆者の教師イメージと実際の教師のしごとが大きくかけ離れていることに気づいた。たとえば、授業はスムーズには進まない。教室を抜け出す子どもを探したり、私語を注意したり、個別に子どもに対応したり、とその都度、授業が中断される。黒板に授業のめあてを書いて終わりという授業もある。授業だけでなく生徒指導もしなければならない。暴力的な子どもへの指導、家庭環境の把握と支援等、指導・支援の範囲が広い。保護者への連絡も大変そうである。また、教師は常に時間に追われているようにみえた。支援先の先生は、スクールサポーターの筆者に支援内容を詳しく指示する時間もない。スクールサポーターとしてさまざまな学級の支援にいくが、誰を、何を、どれだけ支援すればよいかわからない。スクールサポーターとして「よろしくお願いします」というのが精いっぱいであるくらいどの先生方も忙しくしている。授業をスムーズに進行し、子どもに勉強を教えることが教師のしごとであると思い込んでいた私にとって、スクールサポーターとしてみた景色は衝撃的なものであった。スクールサポーターとして小学校に赴くたびに、私の教師のしごとのイメージが崩れていった。

3回生の秋には、スクールサポート先の小学校で教育実習をおこなった。教育実習では多くの授業を担当することになり、教育実習最後の1週間は1日5〜6時間の授業を担当した。1日5〜6時間の授業を担当するとなると、授業準備は間に合わず、教卓で初めて教師用指導書を開く授業もあった。多くの授業を担当することになりとても忙しかった。スクールサポーターとして先生方の忙しさをみてきた以上に忙しいように感じた。ただ、スクールサポーターのような流動的な支援ではなく、指導担当の先生や学級の子どもたちがいたことで楽しい教育実習となった。一方で、教育実習を終えて、筆者には小学校教師は向いていないのではないかなと思うようになった。なぜなら、教育実習は楽しかったが、筆者の中で何かが違うと思った。大学で教育学や教育方法学の専門書を読んでいるほうが楽しいと感じた。そこで、4回生で教員採用試験を受験しつつも、大学院も受験することを決めた。

4回生になり、本格的に教員採用試験の勉強を始めた。教員採用試験の教職教養の勉強は楽しかった。教育学や教育方法学の専門書にある人物の名前をみることもあり、自分の知識を確認することができた。一般教養や小学校全科は苦手であり勉強が進まなかった。しかし、何より苦手だったのは面接練習であった。積極的に発言し、明るく元気な練習仲間をみると気後れした。面接練習には1度か2度参加したのみで、友人に誘われても参加しなかった。面接練習を経験し、筆者には教員採用や小学校教師は向いていないと思った。教員採用試験や小学校教師には、①明るい人間性、②多様な経験、③子どもに対する絶対的愛情(さまざまな事象への対応)の3点が求められており、筆者はこの3点を満たすことができないと感じていた。ただ、教員採用試験に

は無事に合格した。教員採用試験には向いていないと思いつつも、教員採用試験に適應することができた。

教員採用試験の合格後は大学院の入試対策をおこない、N 大学大学院に合格することができた。小学校教師になるまでの2 年間、もっと教育方法の勉強がしたいと思った。

大学院でも引き続き教育方法学のゼミに所属した。修士論文は、卒業論文のテーマを更に深めることを選択せず、教育方法の歴史について研究することにした。教育方法の歴史については一から勉強することも多く、苦労した。修士論文のテーマを決定し執筆を始めたのは2 回生の秋で、短期間で執筆となり、大変だった。大学院に入学してからは大学の4 年間継続してきたスクールサポーターもやめ、勉強と研究に専念することにした。そのため、リアリティ・ショックを含め、教職に就くことへの葛藤からは逃れることができた。

### 3. 学級担任での経験

#### (1) 4 月・子どもとの出会い

4 月1 日、筆者は奈良県下の S 小学校に着任した。S 小学校は、新興住宅街をおもな校区としている学校であり、落ち着いていて穏やかな子どもたちが多く、保護者の教育意識も高く、子どもの学力は高い。初任者が勤務しやすい学校であった。S 小学校は若手・中堅教員が多く、校務分掌や保護者対応等について相談しやすい環境にあった。ただ、スクールサポーターや教員採用試験の練習のなかで教職に就くことへの葛藤を抱き、かつ、大学院の2 年間は学校現場をみていない筆者は、S 小学校への着任を喜ばずにいた。その日のうちに、第3 学年の担任を打診された。翌4 月2 日以降の3 日間ほど、さまざまな会議に参加した。会議の内容はわからないことばかりで、全くついていけなかった。会議のあとは新年度を迎える準備(教室整備、4 月のスケジュールリング、配布物の作成等)をおこなった。会議や新年度を迎える準備は想像以上に時間がかかり大変だった。

担任する子どもの顔と名前も覚えられぬまま、子どもたちを迎えた。38 名の子どもたちは、新学級・新担任の喜びもあって元気いっぱいであった。筆者が担任した第3 学年の学級は、S 小学校のなかでは比較的人数の多い学級で、人数の多さと子どもの元気に不安がこみ上げてきた。

初任者には指導教員が2 人つくことになっていた。1 人は第3 学年の学年主任であり、「初任者指導担当教員」という校務分掌にあった。もう1 人、週1～2 回、学級に入って指導してくれる教員がいた。正式な役職名はわからない。2 人の教員に助けられながら4 月の1 ヶ月を乗りきることができた。忙しさのあまり、4 月はどうのような授業をし、どのような指導をしたかを覚えていない。ただ、子どもとたくさんかわり、子ども1 人1 人がみえるようになったことは覚えている。

#### (2) 授業での困難と解決策(算数)

私の担任した学級は、同学年の他学級と比較して、低学力の子どもが多く在籍する学級であった。とくに算数科の授業で低学力が顕著であった。たとえば、たし算・ひき算につまずく、九九

を覚えていない、筆算の位を間違えて記入する等、第1・2 学年の既習事項が定着していない子どもがいた。既習事項が定着していない子どもは、当然、授業についていくことができない。ただ、だからといって授業中に私語をしたり、授業に関係のないこと(たとえば、折り紙)をしたりするわけではない。真面目に授業に取り組もうとする子どもたちをみていると、何か支援をしなければならぬという気持ちが強くなった。

解決策として、まず、たし算・ひき算のつまずきについては、たし算・ひき算の練習をする時間を確保した。時間を確保することで、たし算・ひき算を間違える子どもは少なくなった。次に、九九を覚えていない子どもに対しては、九九表の下敷きを貸し出した。九九の使用を目的としない教材(単元)では九九表を用いてもよいことにし、子どもの九九のつまずきをなくした。最後に、筆算の位を間違えて記入する子どもには筆算の位シートを作成して渡した。筆算の位シートは、筆算の際に必要な位(1 の位、10 の位、100 の位)を記入し、ラミネート加工したものである。筆算の位シートはノートの幅に合わせてあり、ノートの上のにのせると、縦の位のラインがよくわかるようになっている。筆算の位シートは子どもに好評であり、筆算の位シートが欲しいという子どもが続出した。

このほかにも、第1・2 学年の既習事項の復習をおこないつつ授業を進めた。また、算数科で扱う概念を視覚化できるように、さまざまな教具を作成した。

#### (3) 生徒指導上の困難と解決策

いくつかいじめ事案が発生し、いじめの解決が困難であった。1 つは、友だちの消しゴムを盗み、トイレに流したといういじめ事案である。加害者は、盗んでいた。盗み癖のある子ども(第2 学年からの引き継ぎで盗み癖があると聞いた。)で、第1 学年の頃より、友だちの持ち物を盗んでいた。加害者の子どもは、特定の子どもの持ち物をターゲットにして盗むというよりは、目に付いたものを盗んでいた。被害者は、穏やかな性格の子どもで消しゴムがなくなったことに気づいていなかった。筆者は、周りの子どもからの報告を受け、初めていじめ事案に気づいた。大学の生徒指導論や教員採用試験でいじめの事例を学んではいたが、いじめの解決に向けて、どこからどう手を付けてよいかわからなかった。

大学や教員採用試験で学んだことを思い出したり、指導教員に相談したりしながら、いじめが発覚したその日中には事実確認(聞き取り)をすることができた。いじめが発覚した翌日、加害者を指導した。いじめ事案の発生から日を置かずして、両保護者とも面談することができ、本いじめ事案は早期に解決することができた。

いじめをはじめ、生徒指導であげられる問題は子どもの内面と深く関わる問題である。子どもの個性や家庭環境によって対応も異なるため教師の力量が求められる。初任者の筆者には教師として十分な力量がなかったため、解決が困難であるように見え、とても大変に感じた。



#### (4) 特別活動での困難と解決策

学級担任として、どのように学級活動を展開するか悩んだ。時間割上、学級活動の時間は週1時間ある。学級活動の時間に、年5～6回ある社会見学の準備や学年行事をおこなうこともあった。しかし、学級活動の時間に、学級独自の取り組みをおこなう時間も多くあった。筆者は学級活動の時間に、話し合い活動、お楽しみ会等をおこなった。まず、話し合い活動について、話し合い活動とは、具体的に、学級目標決め、係決めである。第3学年の子どもにとってみんなで何かを決めることは難しいようである。みんなで何かを決めるときに問題となることは、何でもよいという子どもでもある。何でもよいという子どもは学級の一員であるとの自覚に乏しく、アイデア（意見）を出そうとしない。学級の係は何でもよいという。自分のアイデア（意見）を通そうとする子どももいる。そういう子どもは自分のアイデア（意見）が学級で受け入れられないと、学級会への意欲を失ったり、第1希望の係につくことができないと泣いたりしてしまう。

たがいのアイデア（意見）に耳を傾け、自分のアイデア（意見）との調整をおこなうことができない子どもが多い。このようなアイデア（意見）のなさや自分のアイデア（意見）の調整ができないといった問題は、お楽しみ会でも発生する。お楽しみ会とは、学期末や行事終わりの学級活動において、子どもに学級活動の内容を委ねることである。年に数回程度であるが、お楽しみ会を開催することによって、子どもの自主性、行動力を高めることができると考える。

話し合い活動やお楽しみ会で発生する前述の問題の解決策として、話し合い活動やお楽しみ会を可能な限り多く設定するようにした。たとえば、ふつうは1学期に1回のところ、2～3ヶ月で係を決め直すようにした。学級目標については、基本的には4月に決めたままであるが、都度、学級目標への到達度を話し合わせるようにした。お楽しみ会を開催するために、時間の確保に努め、お楽しみ会を年10回程度開催できたように思う。また、何かを決めるときに進め方と注意を書いたワークシートを配布したり、進め方の短冊を黒板に貼ったりした。

## 4. 教科専科での経験

### (1) 4月・辞令交付

3月末、学校長より、次年度の担当の打診を受け、筆者の希望通り、次年度は図画工作科（第3・4・5・6学年／2年目は第4・5・6学年）と家庭科（第5・6学年）を担当することが決定した（2年目は1年生の支援が加わった）。専科教員を希望した理由は3つあった。1つ目は、さまざまな学年の子どもたちと関わりを持ちたかったからである。学級担任は、40人ほどの子どもたちと密な関わりを持つことができるが、担任外の子どもたちと関わりを持つ機会は少ない。さまざま学年の子どもたちと関わりを持つことにより、子ども理解を深めたいと考えた。2つ目は、学校全体に関わるしごとをおこないたかったからである。具体的には、学校の研修・研究に関わる仕事である。次々年度に、奈良県の社会科教育の研究会（公開授業）が本校でおこなわれることが決まっていたため、研究会（公開授業）に向けた研

修・研究を組織したい気持ちがあった。3つ目は、自由な教育実践をおこないたかったからである。1年目は、学年主任が決めたことにしたが、行動（授業を）することが多く、自分で考えて行動（授業を）することが少なかった。学年主任が使用したワークシートを使って授業をしたり、体育の授業は1・2組合同でおこなったりした。自分でワークシートを作成したり、教材を選択したりしたかった筆者にとって学級担任が窮屈に感じた。初任者である私への学年主任なりの配慮であると思うが、小学校特有の各学級で足並みをそろえる教育実践は筆者には合わなかった。専科教員であれば、自分で教材を選択し、ワークシートを作成のできるのではないかと考えた。他にも、私自身、子どもの頃、図画工作科や家庭科が好きだったことから、ものづくりや表現することの楽しさ、自らの生活を見つめ、高めることの喜びを子どもたちにも伝えたいと思い、図画工作科と家庭科の専科教員を希望した。

### (2) 授業での困難と解決策（図工）

図画工作科では次のような困難さに直面した。1つは、作品のアイデアがない子どもへの対応である。描きたいもの、作りたいものがない子どもがいる。また、描きたいもの、作りたいものがゲームや漫画、アニメ等のキャラクターという子どもが多い。低学年（第1・2学年）の頃、キャラクターを描いたり、キャラクターを作ったりしており、図画工作科ではキャラクターを描いたり、キャラクターを作ったりすることができると思い、楽しそうに図工室に入って来る。図画工作科では、子どもたちに自分の表現を楽しんでもらいたかったため、キャラクターを描いたり、キャラクターを作ったりしてはいけないというルールにした。そうすると、子どもたちのなかに作品のアイデアがなくなる。

もう1つは、作り方の説明である。丁寧に説明したつもりでも、子どもには伝わっていないことも多かった。作り方の説明したあとも「先生、どうしたらいいの？」と聞きに来る子どもが多く、対応するのが大変だった。子どもは、1つのこと（第1の手順等）に集中して、説明された次の手順（第2の手順等）を忘れてしまうようである。作品づくりの進度がバラバラであるため、ある程度のまとまりで説明する必要があるが、そうすると、説明が伝わらない（説明を忘れる）子どもが出てくる。

解決策として、作品のアイデアがない子どもに対しては、多くの作品例を用意した。教科書や教師用指導書、出版社のホームページ等掲載の作品例以外にも、出典が明らかな写真や筆者のアイデアも用意した。アイデアが浮かばない子どもは作品例を真似てもよいことにした。学校図書館から、動植物の図鑑やさまざまな写真集を借り、いつでも閲覧できるように図工室の入口に設置することをした。インターネットで検索することができるように、図工室専用のパソコンを用意し設置した。筆者が専科教員になる以前は、図鑑や写真集、パソコンは設置されておらず、必要に応じて学校図書館に行ったり、職員室の貸出用パソコンを持って来ていたりしていたようである。また、作品のアイデアの必要性を問う教材を開発した。第5学年の「心のもよう」（日本文教出版、5・6年上）という教材（単元）である。単元「心のもよう」は、形や色彩で自分の心を表現する。具体的な作品の

アイデアは必要がない。筆を動かし、絵の具に濃淡をつけながら自由に表現し、生まれた表現を大切に。単元「心のもよう」の概要は次の通りである。

【表1】単元「心のもよう」の概要

| 単元名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「心のもよう」(日本文教出版 5・6年上)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 単元目標                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| ○形や色彩に着目して心表現しようとしている。(造形への関心・意欲・態度)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| ○自分の心表現できるように形や色彩を工夫し、簡単な言葉で説明することができる。(発想や構想の能力)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| ○水彩絵の具の特徴を理解し表現したり、モダンテクニック等を取り入れたりして心表現することができる。(創造的な技能)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| ○自分や友人の作品を見て、その共通点やちがいに気づくことができる。(鑑賞の能力)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 単元の展開 (全5時間)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <p>【第1時】制作イメージを形成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品を鑑賞し、制作イメージを形成する。<br/>→教科書の作品例を鑑賞する。</li> <li>・心を表す言葉＝気持ちを表す言葉を集める。<br/>→作文や日記、本などから気持ちを表す言葉を書き出して分類し、グループで交流する。</li> </ul> <p>【第2時】心表現する。(予備活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちを表す言葉をもとに創造し、制作する。<br/>→グループで気持ちを表す言葉の一つを選び、画用紙に書いていく。</li> <li>・制作した作品から気づいたことを交流する。<br/>→共通点に着目し、気づきを発表していく。(グループ/クラス)</li> </ul> <p>【第3時】心表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちを表す言葉を6選び、画用紙に書いていく。<br/>→6以上の言葉、あるいは画用紙でも可能とし、自由に制作する。</li> </ul> <p>【第4時】心にもようをつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1枚の画用紙に心に見立て、心のもようをつくっていく。<br/>→今の自分の気持ちに合わせて貼っていく。</li> </ul> <p>【第5時】心を見つめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品の解説を書く。<br/>→「この気持ちをこのように表現した」「ここをこんな風に工夫した」などを解説として書き、グループで交流する。</li> <li>・グループのメンバーの作品を鑑賞する。<br/>→自分の作品と見比べながら共通点やちがひ、よさなどを見つける。</li> </ul> |

＜拙稿 (2020)「図画工作科における評価の問題」『今日からはじめやすい授業づくり』(8)、19-31 頁より抜粋、一部改変。＞

次に、作り方の説明については、作り方の視覚化を徹底した。実際にやってみせたり、黒板に作る手順のイラストを描いたり(ときには、実物を掲示したり)、作り方を説明したワークシートを配布したりした。配布したワークシートは拡大(A1版)して、教室の左右と後ろに掲示した。

【図1】単元「心のもよう」作品例



＜拙稿 (2020)「図画工作科における評価の問題」『今日からはじめやすい授業づくり』(8)、19-31 頁より抜粋。＞

### (3) 授業での困難と解決策(家庭科)

家庭科では次のような困難に直面した。その困難とは3つの差である。1つ目の差は、生活意欲の差である。自分の生活を見つめ直し、よりよいものにしていきたいという子どもは、私の授業中の発言もメモしていた。ときにはメモをもとに実際に行動し、報告してくることもあった。たとえば、ある子どもは調理実習でおこなったホウレンソウのおひたしづくりに再度チャレンジし、茹で時間を調整した(この子どもは調理実習の際に茹で時間を長くとりすぎた。)ということを報告してくれた。生活意欲の差は、子どもの生活環境に起因している部分もあるだろう。

2つ目の差は、生活技術の差である。生活技術とは調理の技術や裁縫の技術を指す。生活技術の差についても、生活意欲の差と同様に、子どもの生活環境に起因している部分が多い。また、さまざまな経験を通して獲得してきた手先の器用さの問題もある。生活技術の差に応じた支援をおこなうが、生活技術を向上させることは難しかった。たとえば、針の糸通しがある。針の穴に糸を通すことは直接的な教育目標・内容ではない。しかし、針に糸が通せないと手縫いをすることはできない。糸通し(裁縫道具)を使用してもよいこととしていたが、糸通し自体も針の穴に通さなければならず、糸通しを針の穴に通すことが難しい子どももいた。

3つ目は、教室と特別教室の差である。家庭科における知識の習得を中心とする内容の際は教室で授業をおこなっていた。調理実習や裁縫実習といった家庭科における技術の習得を中心とする内容の際は特別教室でおこなっていた。子どもは学校生活の大半を教室で過ごしている。そのため、特別教室である家庭科室に移動することに喜びを感じていた。家庭科室に入ってくると、途端に、教室での学習ルールが崩れてしまう。

解決策として、1つ目の生活意欲の差に対して、次の授業の予告をすることを心がけた。次の授業で扱う事柄について説明し、注意深くみておくことを指示した。生活意欲の差の根底には、そもそも自分の生活を意識していない(生活のなかで困りごとがない。)ことがあると考え、自分の生活を意識させるようにした。また、子どもの生活に近い題材を選ぶことを心がけた。子どもの生活意欲を高める題材(単元)として、第6学年の「1食分のこんだてを考えよう」(開隆堂、『わたしたちの家庭科5・6』)を

開発した。単元「1食分のこんだてを考えよう」は、1食分のこんだてを紙面上で考えるだけではなく、1食分のこんだてを調理実習の時間に実際に作ってみる。調理実習は、例外なく、子どもたちは大好きで1食分のこんだてを一生懸命に考えていた。

【表2】単元「1食分のこんだてを考えよう」の概要

| 単元名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「1食分のこんだてを考えよう」(『わたしたちの家庭科5・6』開隆堂)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 単元目標                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| ○できあがった1食分のこんだてについて、自分なりの視点から検討することができる。(生活を創意工夫する能力)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| ○必要な材料を選び、調理計画を立て、実行することができる。(生活の技能)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| ○多角的な視点から、1食分のこんだてを考えることができる。(家庭生活についての知識・理解)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 単元の展開 (全10時間)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <p>【第1次】五大栄養素とそのはたらきを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「エネルギーになる」「体をつくる」「体の調子を整える」の意味を考え、栄養バランスのよい食事が重要であることを改めて理解する。</li> </ul> <p>【第2次】栄養バランスのよいこんだてを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・給食のこんだてを五大栄養素に分類し、栄養バランスのよいこんだてをイメージする。</li> <li>・栄養バランスのほかに、こんだてを考える視点があることに気づく。</li> <li>・1食分のこんだての考え方(主食・しる物やのみ物・おかずを組み合わせる)を学習する。</li> </ul> <p>【第3次】自分なりのこんだてを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次の条件を満たすこんだてを考える。<br/>条件：①栄養バランス+予算(1人150円)+時間(30分)+α<br/>②ごはんのみそしるに合うこんだてであること。</li> <li>・考えたこんだてについて、グループで批評会をする。</li> </ul> <p>【第4次】調理計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な材料、環境(調理器具等)、調理手順を考える。(各班おかず2品分)</li> </ul> <p>【第5次】調理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちで考えた調理計画と調達した材料をもとに、調理実習をする。</li> <li>・調理実習のふりかえりをする。</li> </ul> <p>【第6次】「1食分のこんだてを考える」という活動を日常生活のなかで考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コンビニでの買い出しを想定し、1食分のこんだてを考える。</li> </ul> |

＜拙稿(2021)「食」分野の教材『今日からはじめる楽しい授業づくり』(9)、62-69頁より抜粋、一部改変。＞

2つ目の生活技術の差に対して、生活技術の差を埋めるには一定の練習が必要となる。しかしながら、家庭科の授業時間内に練習時間を確保することは難しい。S小学校では、放課後に子どもを指導することができなかったため(事前に保護者の許可を

得る必要があった。)放課後の時間を使い練習時間を確保することも難しかった。そこで、教育目標・内容を見直し、何ができることが最も重要かを考え、習得を目指す最も重要な生活技術への1人1人に応じたルートを考えて。前述した具体例でいうと、針穴に糸を通すことができれば、糸通しを使ってもよいというルールにした。糸通しを使うことも難しければ、他の人の力を借りてもよいことにした。私が何本かの針穴に糸を通すこともあったし、班のメンバーにお願いする子どももいた。どのような手段を用いても、玉止め・玉結び、なみ縫い等ができればよいと考えた。

3つ目の教室環境の差に対して、学習ルールを何度も確認することに努めた。授業中に立ち歩いてはいけないという学習ルールがあるにも関わらず、座席や椅子の形状の問題もあって、家庭科室では立ち歩きが目立った。立ち歩きについてはその都度注意し、学習ルールとして徹底するようにした。また、学習ルールを視覚化することも試みた。授業で使用するワークシートや黒板(ホワイトボード)に学習ルールをした。

#### (4) 生徒指導上の困難と解決策

各学級に存在する生徒指導上の課題を抱える子どもについての対応に困難を覚えた。専科教員として、図画工作科で13学級、約480人、家庭科で7学級、約240人の子どもと関わった。どの学級にも、生徒指導上の課題を抱える子どもは5～7人おり、それらの子どもに対応することが大変だった。生徒指導上の問題といってもさまざまで、特別な支援を要する子ども(特別支援学級に在籍する子ども、グレーゾーンの子とも)もいれば、低学力の子ども、家庭の問題(虐待、貧困等)を抱える子ども、反抗的な態度をとる子ども等、問題が異なった。問題が異なるだけでなく、それらの子どもに対する指導方針も異なり、学級担任の指導方針を確認し、理解しなければならなかった。そのうえで、自分としての指導方針を確立しなくてはならない。専科教員は生徒指導の対象となる子どもの人数が多い、学級担任との連携を図らなければならない、少しの関わりで年間の指導方針を決定し、担任の理解を得なければならない、個別に教具を用意しなければならないということで、1学期は対応に迫られた。

解決策としては、まず、学級と子どもの名前を覚えることからスタートした。学級担任とは異なり、全校児童の半分以上と関わることになる。子どもの名前をすぐに覚えることはできない。1人1人の子どもとは1週間で2時間程度の関わりである。また、作品づくりの際は座席を離れることもあり、座席表をもとに名前を覚えることもできない。名簿と学校に保管されている顔写真をみてメモを取りながら、子どもの名前を覚えた。次に、学校に蓄積されている指導の記録や職員会議の記録等を見て、どのような指導・支援がなされてきたのかを確認した。ここまでの作業を終えたのち、生徒指導上の課題を抱える子ども1人1人について、学級担任と話をした。学級担任から、上記の記録にはない保護者の要望についても聞いた。

専科教員は関わる子どもの人数が多いため、1人1人の子どもと深く関わるのが難しく、1人1人の子どもに即した指導、1人1人の子どものニーズに応じた支援を続けていくことが難



しい。指導や支援に対して、学級担任との方針のズレが生じることもあり、ズレの解消も難しい。生徒指導上の課題を抱える子どもと十分な関わりを持つことができなかったケースが実際にはあった。

#### (5) 特別活動での困難と解決策

専科教員として、特別活動のうち、学校行事とクラブ活動（クラブ活動と委員会活動）に関わった。特に、委員会活動に困難を感じた。私は、学校図書館司書教諭の資格を持ち、学校図書館教育推進主任（1年目は副主任）であったことから、3年間、図書委員会を担当した。学校全体として委員会活動が活発ではなかったため、筆者が初任者として着任した1年目は図書委員会も休み時間の図書の貸出のしごとをおこなうのみであった。学校図書館も教室の少ない校舎の3階にあり、1日の利用者が10人程度であった。私は、学校図書館をもっと多くの子どもたちに利用してもらいたいと思い、図書委員会を通して、全校に学校図書館の利用を呼びかけようとした。学校図書館教育推進主任であった筆者は図書委員会の主担当であり、図書委員会の活動を自由に考えることができた。筆者は、ポスターの作成、学校図書館の掲示物の作成、学校図書館だより（月1回）の発行、図書イベントの企画・運営をしようと考えた。しかし、休み時間の図書の貸出以外のしごとをしたくないという図書委員も多く、積極的に取り組んでくれなかった。子どもに聞くと、委員会活動の時間だけしか活動しない委員会もあり、その委員会に比べると、図書委員会は常時活動（図書の貸出）があり、すでに委員会活動の負担が大きいという。休み時間を費やすことになる図書委員会は不人気であり、じゃんけんで負けた子どもたちが仕方なくやっているような状態であった。子どもたちをやる気にさせることが困難であった。

解決策としては、まず、図書委員会として子どもたちにやってほしいことに、筆者や学校図書館司書が先に取り組んだことである。「先生や司書の先生がやってるし、手伝おうかな」と、委員会活動に目を向ける子どもが出てきた。次に、学校図書館に利用者数が少ない現状をグラフにして伝え、どうすればよいかを話し合わせた。子どもたちは利用者数が少ない現状を知らなかったようで、「もう少し本を読んでほしいな」と思ったようである。そして、筆者や学校図書館司書の取り組みに積極的に関わるようになった。「持って帰ってやります」という子どももいた。放課後も委員会活動に取り組む姿勢もみられた。年に2回、図書イベント（貸出スタンプカード、クイズラリー、学校図書館宝探し）をおこなった際は、ほとんどの図書委員が参加し、担当外のしごとをした。図書イベントは毎回大盛況で、多くの子どもたちが学校図書館に足を運んでくれた。

## 5. リアリティ・ショックの受け入れ

2017年4月・2020年3月までの3年間、教師としてさまざまな困難に直面し、その解決策を模索してきた。さまざまな困難に直面することは苦しいことである。とくに、困難によって筆者の教職への理想が崩れていくことが苦しかった。筆者は教職への

理想を追求しながら現実と向き合いたいと考え、2015年以降、2024年の現在に至るまで民間教育研究団体で活動している。

初めて民間教育団体に参加したのは大学院1回生の頃で、全国到達度評価研究会（以下、到達研）の全国研究集会であった。教育評価の研究に興味を持っていた筆者はホームページで到達研の全国研究集会を知り、行ってみることにした。到達研の歴史と理念については本で読んだことがあったために知ってはいた。到達研の全国研究集会には気軽な気持ちで参加した。到達研は小さな組織で、何十年も前から到達度評価を進める人たちがばかりであった。到達研の組織の内情は知らなかったため、大学院生の筆者が参加することはとても場違いのように感じた。すぐに立ち去ろうとしたが意見を求められ、到達研のメンバーが開催している月1回の「社会科勉強会」に誘われた。到達度評価や社会科の研究がしたいわけではなかったが、ひとまず参加してみることになった。

「社会科勉強会」では、おもに、中学校社会科の授業づくりに関する実践報告がおこなわれていた。中学校社会科の教材開発、子どもの学力実態に応じた授業づくり等、「社会科勉強会」に参加することで、教材・授業づくりの面白さを学ぶことができた。また、教材・授業づくりの面白さだけではなく、共に学び合う仲間を得ることができた。共に学び合う仲間といっても、50～70代のベテランの先生方で、教材開発の意義や子ども（とくに、学力面で「しんどい」子ども）の実態、子どもの支援方法等、教えられることばかりであった。2015年から2024年の今日に至るまで、約9年間、「社会科勉強会」には参加し続けている。ただ、途中、修士論文の執筆、新任期の多忙、妊娠・出産、育児により参加できない期間もあった。参加できない期間も、「社会科勉強会」の先生は「社会科勉強会」の日程や様子について連絡してくれた。到達度評価や子どもの学力保障といった教育理念・目標に向かう仲間がいるということは、とくに新任期の私にとって心強いものであった。

到達研のほかにも、さまざまな民間教育研究団体に参加したが、「奈良作文の会」も新任期の私の心の支えとなった。月1回程度おこなわれる「奈良作文の会」の例会等に参加することになったきっかけは、初任校であるS小学校の同僚に誘われたことにある。S小学校での勤務に馴染めなかった筆者に、同僚が「奈良作文の会」の例会に参加してみないか、と声をかけてくれた。初年度の2017年当時、生活綴方・作文教育にあまり興味はなかったが、試しに参加してみることにした。はじめは、子どもの作品（作文等）を読むことの意義がよくわからず、参加を辞めようかと思っていた。しかし、「奈良作文の会」の例会等に参加し続けることで、子どもの作品（作文等）を読むことの意義が理解できるようになっていった。「奈良作文の会」例会等に参加することでもまた、ともに学び合う仲間を得ることができた。「奈良作文の会」は若手・中堅の先生方が多く、指導上の悩みを共有することができた。「奈良作文の会」の例会等へは2017年から2024年の今日に至るまで、約7年間参加し続けている。2020年から2024年現在に至るまで生活綴方研究を進めているのは、「奈良作文の会」の例会等への参加による学びの影響が大きい。

到達研メンバーによる「社会科勉強会」も「奈良作文の会」の



例会も、私の居場所となっていた。当然、「社会科勉強会」や「奈良作文の会」の例会等に参加することによって、それぞれのテーマにもとづく学びがあった。しかし、それ以上に、私にとっては仲間がいるということの意味が大きかった。大学時代からの友人（大学時代の友人の多くは教師である）でもなく、職場の同僚でもない人々と関係を持ち、しかも、自分に近い教育理念・目標をもつ人々と語り合うということは、現実との葛藤のなかで職務を遂行する新任期のリアリティ・ショックを乗り越えるためには不可欠であったと感じている。

## 6. おわりに

本稿では、リアリティ・ショックとリアリティ・ショックの克服の方法について、リアリティ・ショックが生じる授業、特別活動、生徒指導に焦点をあてて、筆者のライフヒストリーの記述（困難と解決策等）をもとに検討した。検討を通じて、次のことが明らかとなった。

第1に、リアリティ・ショックが生じるのは新任期に限られない。筆者のように、幼少より教職への憧れを抱き、教職に向かって歩みを進めてきた場合、スクールサポーター等のボランティアとして学校現場に入ること、教職に就く以前にリアリティ・ショックに遭遇する。スクールサポーター等のボランティアはあくまで学生としての支援の立場であり、教師の立場にはないため、リアリティ・ショックを克服することは難しい。ただただリアリティ・ショックに直面するのみである。スクールサポーター等のボランティアよりもリアリティ・ショックに直面するのが教育実習である。教育実習では、教師としてのふるまいが求められるため、多くの人がリアリティ・ショックに直面するのではないだろうか。実際、教育実習を経て、教職の道に進むかどうかを決定する学生も少なくない。教育実習で遭遇するリアリティ・ショックは、スクールサポーター等のボランティアと比較すると、その克服を試みる時間はある。しかしながら、実際はリアリティ・ショックを克服することはできないと思われる。リアリティ・ショックの克服への試みとして、教育実習後の大学の学びのなかで教職イメージを組み換えていくことが考えられる。教職に就いてからのリアリティ・ショックを最小限にとどめるために、たとえば、教育実践の記録を読むということがある。筆者のように、民間教育研究団体が開催する研究会等に参加し、現職教員と交流するという方法も考えられる。教職に就く以前に、教職へのイメージを現実のものに近づけることで、新任期においてリアリティ・ショックを最小限にとどめる、あるいは回避できる可能性はある。

ただし、第2に、リアリティ・ショックの克服は必ずしも求められない。リアリティ・ショックが子どもの困難ではなく、教師の困難のみにとどまる場合、リアリティ・ショックの克服を保留してもよいだろう。筆者の場合、民間教育研究団体の研究会等に参加し、共に学び合う仲間を得ることで、教職イメージの理想を追求していた。具体的には、仲間とともに、理想の教育理念・目標について考えている。教職イメージの理想を追求することも、教師の力量を高めるためには必要であろう。また、リアリティ・

ショックの克服の方法のヒントが得られる場合もあるだろう。

最後に、今後の課題として、筆者のライフヒストリーの記述をリアリティ・ショック研究のなかに位置づけることがあげられる。どのようなリアリティ・ショックが生じ、どのようなリアリティ・ショックの克服の方法があるのかを蓄積していくことは、教職のありかたを考えるうえで示唆的である。

## 引用・参考文献

- 高井良健一（2015）「生涯を教師として生きる」秋田喜代美・佐藤学編著『新しい時代の教職入門〔改訂版〕』、108-131頁。  
拙稿（2020）「図画工作科における評価の問題」『今日からはじめる楽しい授業づくり』（8）、19-31頁。  
拙稿（2021）「食分野の教材」『今日からはじめる楽しい授業づくり』（9）、62-69頁。

## 謝辞

本研究は、住友生命第15回「未来を強くする子育てプロジェクト」の助成を受けたものである。